

小田原史談

第 145 号

発行所 小田原史談会
小田原市栄町2-13-20

伊藤博文

ハルピン行を前に最後の写真

前列に見慣れた顔が……。いわずもがなだが、明治の元勳、伊藤博文と山県有朋。

共に小田原に有縁の人である。

博文は、明治二十三年(一八九〇)十月、小田原海岸御幸の浜に接する地に別荘滄浪閣を営み、二十九年、大磯に移る迄、しきりに東京との間を往来した。

有朋は、明治四十年(一九〇七)九月、七十歳に達したのを期に、小田原板橋の丘上に別邸古稀庵を設け、晩年をここで過した。

小田原に縁のある人がもう一人いる。

二列目の向って右から四番目、顔をやゝ左に向けた人、室田義文である。

義文は、写真所蔵者福田綾女史の祖父に当り、小田原板橋掃雲台に住む益田孝の招きで、大正十年(一九二一)秋、天神山(小田原市城山四丁目二

〇番三五号)に居を構え、ここで九十二歳の高齢をもって生涯を閉じた。話はあと先になるが、義文は、三十三年(一九〇〇)外務省を退官し、貴族院議員・宮中錦鶏間祇候の身分にあったが、博文の信頼厚く、彼のハルピン行に随行している。博文が狙撃されたとき、義文はよろける彼の体を支え、また彼の最後を見とった。

写真は、博文がハルピンに旅立つ三日前の明治四十二年(一九〇七)十月十一日、赤坂霊南坂の枢府議長の公邸で撮られたものである。彼は、この年の六月統監を辞し、四度目の枢府議長横すべりをしている。

この日の夕方、博文の一行は桂総理主催の送別晩餐会に招かれていた。その数刻前、有朋は伊藤を公邸に訪れ別れの挨拶をしている。晩餐会を前に正装した博文は、家族を従え、有朋を囲んで、同じ正装の随員と共に記念撮影したのである。(岡部)



小田原叢談(五)

石井富之助

酒匂橋 今昔

酒匂川といえば、江戸時代には人の肩を借り連台に乗って渡る川越えで、橋なんかなかったと思ひ勝ちだが、実は冬場の渇水期には土橋がかけていた。それも意外に古く、寛永年間稲葉丹後守正勝の時代にはじまるという。

この土橋のことはいろいろな本にのっている。下田奉行の小笠原長保が文政七年(一八二五)に書いた『甲申旅日記』という道中記には

この川は北から南へ流れて、左一丁ばかりで海に入っている。幅は四丁ばかりある。今日は四瀬になっていて土橋が三つ渡してある。連台に乗って二丁ばかり行ったあたり、台をかついでいるもの膝の下三四寸ばかりは水があった。

とある。土橋は普通十月五日から翌年三月五日までとなっている。長保が通ったのは三月二十日ごろのことだから、もう人足による川越えがはじまっていて、それで連台に乗ったのかも知れない。ここには橋は三つとなっているが、毎年瀬がかわるから数は一定でない。わたしの見た絵には六つかかっていた。

またシーボルトの『江戸参府紀行』(一八六〇)には

このあたりでふたつに分かれて海に注ぐ酒匂川を越えた。橋は木の台の上ののせたそまつなけたでできていて、わらや松の枝でおおってあった。こういう橋は戦争中にはヨーロッパでもあまり広くない川なら応用されるかもしれない。

橋の作りを細かに観察していて、ヨーロッパでも使えそうだとおもうのはおもしろい。

ちゃんとした木橋がかけられたのは明治十五年二月で、長さは一八八間(三六〇メートル)幅三間(五・四五メートル)のものであった。木橋はその後洪水にあたり、腐朽したりして、いくたびか修復されているであろうが、ともかく大正十二年までかかっていた。一号国道を東へ向って行くと今の酒匂橋の手前で道路が二またに分かれている。その海側の道を白鷗中学校の方へ行き、左に曲って城東高校の前を通り、八幡神社のところでもまた右に曲り、それからまっすぐに橋がかかっていたと覚えていた。その上を電車がガタゴトとゆっくり走っていた。

これが鉄筋コンクリートの橋に生れ変わって開通したのは大正十二年七月一日であったと古老はいう。

当時、酒匂から鴨宮へ通ずる道路をしばらく行った右側のところに、明治大正の大通人として知られた平岡吟舟の料亭があって、これを三望園峯龍といった。



酒匂橋を渡る電車

吟舟は二弦琴東明曲の創始者で、即興で作詞、作曲し、それをすぐ芸者などに教えるということをよくやったものである。

酒匂橋開通の時、白鷗中学校入口のところに水産試験所ができ、開通式といっしょに開所式を行った。吟舟はこれを祝って「祝酒匂橋開通式、水産試験所開所式」の歌を作った。この全歌詞は「小田原歌謡物語」に載せてあるので、ここにはそれぞれ一番だけを紹介することとしよう。

へ酒匂の橋が

できたかえ

できたとも

長さは二百と十間余
こちや東海一の
名橋さ

どうだい立派だろう

「ソラ、ピーヤはね、
鉄筋コンクリートで、
四角で丈夫で上は
アスファルトで、
見事にぬりあげた。

○

へここは水産試験所さ
そうだと

矢羽根のかざりを
家のむねにあたる

八方外海の産物を
なんでも集めて

「ソラ仕事ハネ赤玉
白玉風車でよせいし
御門のハイカラ
だれでも見にこい
大かんげい

まことに自由奔放の作であるが、これは式の当日小田原芸妓連の出演で、にぎやかにひろうされた。

ところがこの橋はたった二か月の短命で終わった。関東大震災でめっちゃめっちゃに壊れたのである。

酒匂橋の復旧したのは大正十五年五月のことで、それからずっと一号国道の橋として重要な役割を果たしてきたが、昭和四十七年七月十一日に襲来した集中豪雨によって、まんなか辺の橋げたが落ち込んでしまった。この日の豪雨が山北町三保部落に大被害をもたらしたのはまだ記憶に新しい。

酒匂橋はただちにその全部のかけ替えが行われ、これよりさき一月二十九日に

初音 新地

全通した西湘バイパスの橋と二本並んで、交通のなめとなっている。

小田原の遊女屋は江戸時代の飯盛女に始まり、明治三十五年まで東海道筋に散在していた。どの辺に何という店があったか、それらしい人に当たっていたら、ある老人が明治三十年ごろのものだといって、料理屋、芸者屋、遊女屋の位置を書きこんだ図面まで作ってくれた。それによると、袖が浜の入口あたりから旧中宿までの間に十七軒の遊女屋があったことがわかる。

郷土史研究家片岡永左衛門氏は、明治十五年に税金改正が行われて、貸座敷業の税金が料理屋より相当高くなった。遊女は貸座敷以外のところでは商売ができないうが、芸者は料理屋でも待合でも自由に商売ができる。制限のある方の税金が高くなって、自由な方が安くなったわけである。それで貸座敷業から料理屋へ転業する者が多くなり、その需要に答えるため芸妓の数

がにわかに増加し、逆に娼妓は減少するに至ったといっている。

その上、明治二十三年に神奈川県会で廃娼決議が行われ、全国的には自由廃業事件や東雲楼のストライキ事件などがあって、娼妓の人権問題が世の注視を浴びるようになった。

このような動きの中で、明治三十二年、従来市街の中心に軒を並べていた遊女屋を指定地を集めるという措置がとられるに至った。この時指定されたところは旧古新宿の海側の一郭であった。いろいろむずかしい問題があったであろうが、遊女屋が移転の準備にとりかかったのはやむを得ないことであった。しかし、実際の移転はそうおいそれとは運ばなかったらしい。

三十一日、小田原見物、遊女屋が軒を並べてにぎやかである。

とあり、また「城の石垣」(明治三十五年三月)には

相州小田原の町に電車鉄道待合の茶店の亭主のいうところによれば、土地のしおから、かまぼこ、ういろう及び竹屋の藤、金格子の東海楼、料理店の天利、城の石垣、外郭の梅林はおよそ日本一である。

と、東海楼の名がでてくる。しかし、この小品が書かれた明治三十五年には、古新宿にすでに遊廓ができかけていたのである。

ところがまたまた大事件が持ち上がった。それは同年九月二十八日小田原一帯を襲った大津波である。これは関東大震災とともに、明治以後の小田原の二大災害といふべきものであるが、この津波でほとんどできあがっていた遊女屋は跡かたもなく押し流されてしまった。

そこで指定地替えが行わ

れ、あらためて新玉四丁目、現在の新玉小学校前通りと旧竹の花から東へ通ずる大新馬場とがぶつかる、ちょうどその曲り角の北側の一廓が指定された。そして、明治三十六年、以呂波楼、加納楼、菊本楼、松本楼、東海楼、宝来楼、金昌楼の七軒が入って遊廓を形成した。周囲にへいと一間幅のみぞをめぐらし、大門は南に面していた。大門を入ると中央は広場になっていて、南側にすし屋、おでん屋、射的屋などが並び、遊女屋は北側に軒をならべていた。これを初音新地という。大正四年の『第一回小田原町勢概観』をみると、

近代小田原百年小史稿 (三)

高田喜久三

明治期の小田原 (三)

灰色の霧の中に眠ったような存在であった明治の小田原でも仔細に見てゆくと、いろいろな事件が起っている。その中でも小田原の人々を恐怖に陥れたのはコレラの流行である。コレラは鎖国日本が開国に踏みきった幕末期から流行をはじめ、医学のまだ発達していなかった当時、京阪から江戸へと猛烈な勢いで蔓延して行った。発病すると数日して死亡するので人々はこれをコロリと称して恐怖のどん

た。周囲にへいと一間幅のみぞをめぐらし、大門は南に面していた。大門を入ると中央は広場になっていて、南側にすし屋、おでん屋、射的屋などが並び、遊女屋は北側に軒をならべていた。これを初音新地という。大正四年の『第一回小田原町勢概観』をみると、

娼妓数	五七名
娼妓置屋	七軒
娼妓就業延日数	一九、三七〇日
遊客数	四六、五五六人
収入高	五三、二六八円七八銭

となつている。
当時小田原の人口は二二、七七二人であった。初音新

底に呻いたのである。
小田原では明治十五年に大流行し、この時には弁財天曲輪に小田原五ヶ町連合の伝染病舎が設けられた。ついで二十三年には患者数一五五名うち死亡八十名と言つた惨状である。さらに二十八年にも一三八名が発病し八十八名が死亡している。コレラ流行の最大原因は小田原に完全な上水道がなかったからである。

小田原の人々の飲用水は井戸水の使用もあったが、大部分は小田原北条時代に造られた小田原用水、すな

地の客はもちろん外部から来る人が多かったが、この人口にくらべてみてほしいへんな繁盛振りであったことが想像される。わたしの家は銀座通りであったが、夏の夜など二階にいと風向きによっては三味や太鼓のさんざめきがぎやかに伝ってくるのをよく耳にしたものであった。

この繁盛はそれ以後も続き、大正六年には娼妓数七六人、遊客数五四、〇〇〇。大正七年の遊客数は六七、

わち上板橋村の早川から取水した水を東海道の路上に裸のまま流して、これを生活用水としていたのである。医学知識の低さと粗末な用水構造とが相まって、ひとたび上流でコレラが発病した場合忽ちに蔓延するのである。

コレラが終息したのちも赤痢、腸チフスの悪疫は明治以後大正にかけても屢々流行し、小田原の人々の完全な上水道設置への熱望はますます高まって行った。

しかし上水道設置には莫大な資金が必要である。明治の小田原町当局は資金難に悩みながらも板橋村あるい

〇〇〇とはね上がっている。この遊廓も関東大震災で一瞬にして壊滅したが、たちまちにして復興し今度は三階建ての高楼が軒をつらねた。昭和四年に娼妓数が八七名とまた増加しているところを見ると、ますます繁盛したことがうかがえる。それが昭和十八年ごろに至り軍需産業の工場の寮となり、江戸時代から続いた小田原の公娼はついに消滅してしまつた。

は、須雲川に水源を求めて設置運動はしているが、水源地の反対が根強くいつも失敗している。この当時の中央政府は、産業振興と軍備拡大にのみ力を注いで、いわゆる地方の社会資本投下には目もくれなかったのである。小田原の人々が幾多の変遷を経て上水道の恩恵に預かることが出来たのは昭和十一年までの永い歲月を要したのである。

明治時代、疫病流行の外に町民を悩ましたものに火災と台風禍がある。火災が屢々大火となって大きな被害をもたらした大きな原因は、当時小田原町民の住家

が、いわゆる小田原葺と称する板葺屋根が多かつたからである。それに加ふるに消防組織がなく、小田原で民間消防組織が出来たのは、明治十一年、幸地区の有志が自主防火組織を作つたのが始めで、以後各町内とも自主的な消防組織、いわゆる組消防団を作り、明治十七年にはじめて連合の消防出初式を行っている。しかし町自体が常備消防組織を造つたのは遙か後年の昭和五年である。

大正十二年九月一日の関東大震災の火災による被害を身にしてみても感じた関東の人々は、それ以後屋根にト

タン板を葺くのを常識とした。トタン板は火にも強く、軽量でしかも安価であるのに瓦とちがって地震に遭っても家屋が倒れることがないなどの理由から南関東ではトタン屋根一色になったのである。現在でも箱根山を越えて西に旅すると、何処の町でもすべてが瓦屋根であることに、関東人である私たちはいつも、別世界に入ったような気持になるのである。

さて明治小田原の災害でもっとも異色なのは明治三十五年九月二十八日に起きた大海嘯災害である。これは地震による津波ではない。

高潮と台風が重なり合って生じた災害であった。この時の災害の凄じさは最近になって多くの人の知るところとなったが、この災害の原因は、北条時代に築かれた小田原城外郭の海岸部の土塁が、その後永らく荒廃に打ち捨てられて大浪に対して全く無防備であったからである。従って明治三十五年以前にも屢々大浪による被害が伝えられている。三十五年の海嘯被害は小田原だけでも死者十二名、流失家屋二九三戸、全壊一四四戸と誌されている。大海嘯による未曾有の災害を経験した小田原の人々

は海岸堤防築造を急務と考え、同年十月二十日付で小田原町長代理助役片岡永左衛門は神奈川県知事周府公平宛に築堤の急務を請願している。しかしその後県からは何んの音沙汰もない。町民はやがて自ら築造に乗り出し、翌三十六年七月には高梨町海岸の防波堤工事が落成した。高さ平均十三尺(四メートル)、延長百三十一間(約二四〇メートル)築造費四千六百九十九円と誌されている。つづいて古新宿海岸、千度小路海岸と代官町海岸が完成している。

これらはいずれも住民の寄付金、借入金をもって充て、公共の資金が投入されていないことに注目すべきである。この堤防は多少の修理はあったものの昭和四十二年、西湘バイパスが築造されるまでの永い期間、一キロメートルに亘る偉容を誇り、沿岸住民にとって忘れがたい建造物であった。このように永いこと日蔭に捨てられていた小田原に、発展の曙光がさしはじめたのは、当地方の気候温暖、風光明媚に気づいた京浜間の知名士が、休養、静養の

目的で訪れはじめてからである。有名な伊藤博文の滄浪閣が造営されたのは明治二十三年である。日露戦争で軍人の地位が高まり山原有朋はじめ多くの軍人が小田原地方に別荘を造りはじめた。それにしても小田原の地が世に認められるためには交通機関の設備がまず必要であった。このことについては次の大正期の巻で述べることとする。(統)

川柳

高井喜雄

真実も少しは混せて祝辞述べ

不惑過ぎ美人になれるキザシ無し

大安に気づくホームの白ネクタイ

地下街に降りてつぎ足す旅みやげ

どう見ても七光には遠い親

資料

小田原町各種組合

- ◎小田原町商業組合連合役員
 - 会長 外郎藤右衛門
 - 副会長 石井定吉 吉田義生
 - 常務員 井上嘉七 西村幸助
 - 日比谷興八 横小路豊七
 - 大木 松次 小西尚三郎
 - 宮内好太郎 永田 清助
 - 里見喜之助 伊藤 正七
- ◎履物商組合(二十九軒)
 - 組長 吉田 吉蔵
 - 副組長 杉本 義造
- ◎足袋商組合(三十二軒)
 - 組長 柴田馬太郎
 - 副組長 中津川金五郎

- ◎酒商組合(九十軒)
 - 組長 伊藤市兵衛
 - 副組長 大木 松次
- ◎米商組合(百八軒)
 - 組長 石井小次郎
 - 副組長 山室 龍蔵
- ◎小間物商組合(十六軒)
 - 組長 宮内好太郎
 - 副組長 内田 賢三
- ◎荒物商組合(十八軒)
 - 組長 中津川兼吉
 - 副組長 山田吉三郎
- ◎輪業組合(十五軒)
 - 組長 瀬戸伊與吉
 - 副組長 岡田 清治
- ◎菓種商組合(十九軒)
 - 組長 眞壁仲次郎
 - 副組長 小西尚三郎

- ◎古着商組合(十一軒)
 - 組長 高井作次郎
 - 副組長 石井喜兵衛
- ◎陶磁器商組合(十五軒)
 - 組長 曾我與三郎
 - 副組長 永田 清助
- ◎菓子商組合(四十七軒)
 - 組長 高橋 英治
 - 副組長 越川金次郎
- ◎綿商組合(十五軒)
 - 組長 井上 嘉七
 - 副組長 西村 幸助

資料は大正の末から昭和の初めにかけてのものとして推定される。

小田原の浮世絵 (三)

岩崎宗純

六城と宿場

衆知のように江戸時代の

小田原は、藩主大久保忠世に始まり、番城時代・稲葉氏時代・後期大久保時代と続く、小田原藩の城下町です。と同時に、東海道五十三駅の宿場の一つとしてもにぎわったところでもあり、いわば城と宿場が小田原の都市的景観を彩っていたといえましょう。

そこで、そのような視角

から小田原を描いた浮世絵を少し紹介しておきましょう。

溪斎英泉「小田原宿十」(天保前期・鳶屋)。画面の中央に英泉の得意とするあだっぽい美人を配し、その背景に小田原城が見える、という構図になっています。画面右下に、

見るもののみな目につくや
春の山 三日月風妓



「小田原宿十」 泉 英 齋 溪

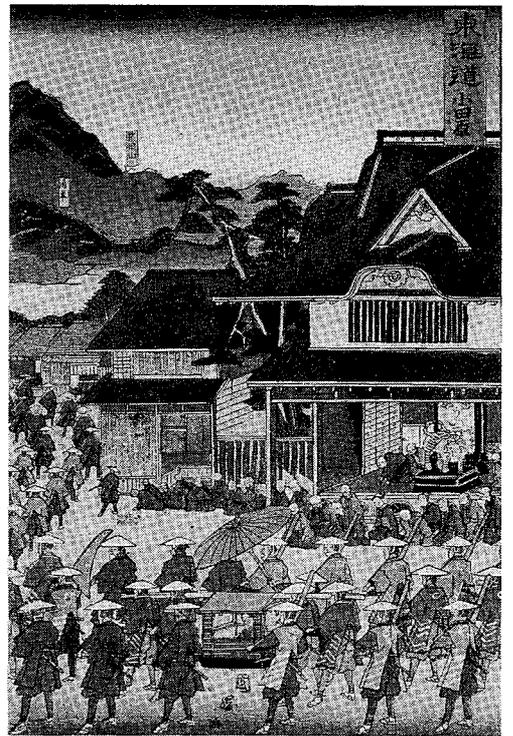
ズには「御上洛東海道」という別称があります。文久二年孝明天皇の妹皇女和宮と結婚した家茂は、翌三年二月上洛し、孝明天皇と接見することになりました。將軍家の上洛は三代

將軍家光以来であり、またこの結婚を背景に進められたつあった公武合体に反対する倒幕派の志士が、行列を襲撃するという噂も立ち、世上騒然とした中での上洛でありました。江戸の浮世絵版元たちにとっても、この上洛は格好の話題となりました。各版元は、江戸の浮世絵師を総動員して東海道の各所に配置し、將軍上洛の様子を描かせ、次々と出版していきましました。今様に言わずならば、報道特別番組といったところでしょうか。したがってこの一連の「御上洛東海道」物は、かなりの点数にのぼり、おそらく一五〇点は超えるものと思われまます。

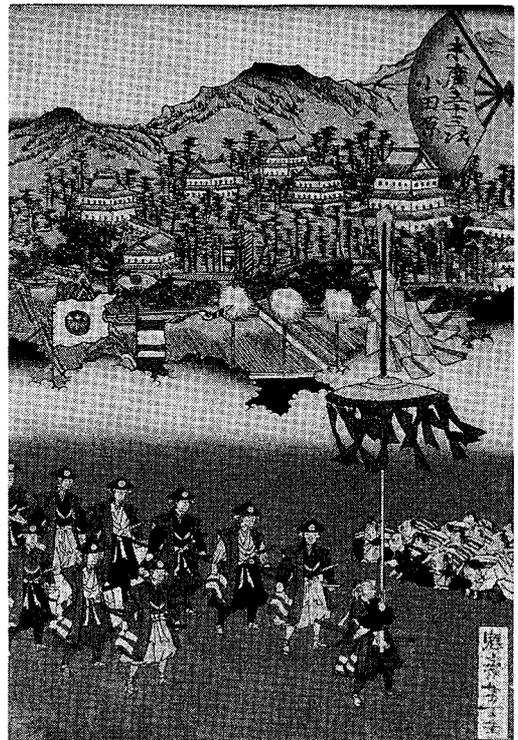
因みに「御上洛東海道」の「小田原」は、他に一点海岸の松並木を行列が通る様子を描いたものがあります。さてここで紹介する「東海道・小田原」は、小田原宿内の外郎家の前を通る家茂一行を描いたもので、駕籠の中にいるのが家茂です。外郎家のことは、小田原の皆さんはよく御承知だと思いますので触れませんが、街道に面した同家の玄関口にあった虎の衝立絵は、江戸時代外郎の前を通る旅人たちの眼を引きつけ、いくつかの旅行記にも記されています。

月岡芳年「末広五十二次・小田原」(明治元年・山口)

という俳句が載せられています。英泉のこの東海道シリーズは、すべて美人を中心に背後に各宿場の情景を描いたものですが、大磯をはじめなかなか艶のある挿物です。



歌川国綱「東海道・小田原」



月岡芳年「末広五十三次小田原」

「御上洛東海道」と対象的なものが、この「末広五十三次」と呼ばれる東海道シリーズです。慶応三年(一八六〇)二月九日、王政復古宣言が発せられ、三百年にわたり長期政権を維持してきた徳

川幕府はついに崩壊します。しかし翌明治元年一月、將軍徳川慶喜は、朝廷に帰順することに抗し、海路江戸へ帰ります。同年一月七日、慶喜討令が発せられ、官軍が東海道を東上します。二月二十七日朝廷より幕府討伐の藩意を問われた小田原藩は、朝廷に従うことを誓います。官軍の先鋒隊が小田原に到着したのは翌二十八日のことでした。

「末広五十三次」は、東上する官軍が東海道の各駅を通過する様子を描いたもので、家茂上洛の様子を描いた「御上洛東海道」が出版されたわずか六年後のことです。まさに激変する時代を象徴するような「東海道」シリーズなのです。この「末広五十三次・小田原」は、小田原宿を通過する官軍と背景に小田原城を描いたもので、図柄はそれほど新鮮さを感じさせませんが、画面の中から激動する時代の足音が聞こえてくる思いがします。

井細田八幡神社の昭和史(一)

―創建四百周年に思う―

星野 幸 一

一 創建とその時代
井細田七軒百姓という伝承口碑が残されているが、国郡制時代以前の村の姿であるうかその年代は定かでない。

江戸時代の書『新編相模風土記稿』によれば井細田村(小田原市扇町二丁目)は江戸より行程廿里、戸数九十、広(東西)六町余、袤(南北)五町半、東 今井

町田二村、西 久野池上二村、南 池上荻窪中島三村、北 多古村、永正十六年(一五五九)四月北條早雲当所を管根権現に寄附し、幼息菊寿丸(後の幻庵)の知行に宛行う。永祿(一五六〇七)の頃も幻庵の知行たり。今大久保加賀守忠貞領す。検地は萬治二年(一六六〇)領主稲葉美濃守正則領す。甲州道村の南北に貫けり。道幅一間半。久野川は西南

の村界を延亘す。幅四間或いは六間。土橋を架す。長九間。甲州道にあり。八幡社は村の鎮守、神体僧形、天正の末、村民次郎右エ門(名主、與右エ門の祖)勸請す。例祭七月廿三日角舩(相撲)を興行す。村持、下同、社地に社守の庵あり。末社として神明社、是も天正の末、村民彦右エ門(名主彦右エ門の祖)勸請す。天明社同じ頃村民六左エ門勸請す。社地に古松樹あり。圍一丈四尺と記されている。神社の来歴は歴史の中に埋没し去ったものもあろうが天正十九年嘗田別命(応神天皇)を祭神として

名主星野治郎右エ門が勸請、小名「若宮」の地に鎮座したと伝え「若宮八幡」とも呼ばれている。この界限は太閤小田原攻め(天正二年)の折、北條方大名太田十郎氏房(五代氏直の実弟、武藏岩槻城主)軍と豊臣方大名織田信雄(信長の二男、尾張清州城主)軍が久野川を挟んで対峙した久野口と井細田口を結ぶ約二軒の中央部に位置し、

緒戦に於ける包圍攻撃及び夜襲では城への突破口は成らず激戦となり双方多数の死傷者を出したのである。西の鈴木家(現在の西丸ストア)は兵火によって焼失したと伝えるが修羅場と化した村内の戦禍に思いを致すとき、芭蕉が『奥の細道』で平泉の栄華を偲びつゝ詠嘆した。国破れて山河あり 城春にして草青みたり

の詩句が脳裡を去来するのである。かくて神社は小田原落城の翌年に創祀されたのである。

二 神仏習合から

神仏分離の時代へ

奈良時代の仏教伝来以降、日本固有の土着宗教と、外来宗教は、渾然一体となつて習合の思想が形づくられ、神仏を同じところに配祀する習俗は江戸時代の末期まで続いたのである。

村民の氏子意識は現代に

較べるとネイティブであり、祭儀は神官が祝詞を唱え、或いは僧職の読経があり疫病退散か村民の幸福等、現世利益に対する願望から氏神様を中心とした生活を営み、神仏習合は幕藩体制下に於ける神仏観の根底をなしてきたのである。

明治維新後、新政府は祭政一致による神道国教化の方針を定め、明治元年三月廿八日、太政官布告(政令)により神仏分離令を發布、神体と仏像を配祀することを禁じ、明治四年には仏教抑圧策として、大小神社氏子取調べが行われ氏子には神社から氏子札が交付されたのである。

私の家は、祖父喜三郎の氏子札が現存するが、長さ九センチ、幅六センチ、厚さ六ミリの木札で表面には

生国 相模

父 星野長右エ門三男

井細田村八幡神社氏子

星野喜三郎

慶応元乙丑年

七月八日出生

と記して中央に神社印が押され

裏面には

明治五千申年正月晦日

旧神官

窪倉信房

と記され神官印が押されている。

神社は日蓮上人の仏像を配祀していたが、南の中戸川家(現在の憐中戸川製粉)が現在の井細田公民館の土地を寄附されたので、公経堂を建立して仏像を堂裡に遷座、村内の日蓮宗信徒は妙法講(講中には染抜きの禪を頒布)を結成して月並を開き御祖師様を奉祀してきたのである。

従来、井細田には集会施設がなく公経堂を借用してきたが、昭和三十三年に公経堂を解体して、公民館が建設され三十八年に増築し

て今日に至っているが、館内に仏像を祀ることは祭政分離の原則上認められず用地使用のいきさつから館の右手奥外側に仏像を祀るための小庵を設けたのである。

昭和三十年代後半までは信仰心厚い老婆が守をしていたが歿後は門を閉ざして居り、春秋の彼岸に区内三寺院(長安寺、妙円寺、正蓮寺、何れも日蓮宗中山派の末寺)の住職が交代で氏子会自治会の三役が出席して奉祀しているが、公民館と仏像を分離することが今後の課題となっている。

妙法講は戦後先達がなくなり自然解散したが、嘗て、公経堂に於て月並を開き、御会式には妙円寺から今井の本光寺まで万灯パレードで供養した戦前の思い出がほのかな郷愁を誘うのである。

例祭は九月十八日が宮宮、十九日が本祭となり神官は観行宮司が八幡神社の宮司を拜命し現在に至っている。

三 昭和初期の再建

大正十二年の関東大震災により神社は倒壊したが再建に取掛かったのは昭和になつてからである。

当時の井細田区の決算報

昭和十四年夏公経堂にて二川青年団(井細田・多古・今井)の会合
前列右より二人目団長鈴木平八氏、二列目右より三人目筆者



告書を見ると昭和二年に神社、拜殿寄附金帳として十一月より六月、十一月の年二回宛拾回に納金されたこと記している。

てみよう。

○昭和三年

金七十二円九十六銭

小祭二回諸入費

金四十五円八十銭

大祭に付美遊喜松料理屋
扇町二一七・二に所在した

○昭和四年神社の部

金四拾円 拜殿新築に付功

勞者に記念品

金六拾円六十五銭

小祭一回諸入費

金壹百円 大祭に付余興費

金四十四円八十五銭

大祭に付美遊喜払

社殿幣殿建築費総金額

金五千四百六十二円九十一銭

神輿置場新営工事費

金貳百參拾九円五十五銭

神社橋梁改築費

金壹百參拾九円六十七銭

拜殿境建具及材木費

金五十二円八十銭設計費

横手石橋新営及橋

金四十三円八十一銭

落成祝賀式入費

五十四円七十銭

小計 金五千九百八十九円四十四銭

○昭和五年

金四十九円八十八銭

小祭に付諸入費

金五十円 大祭に付余興費

金參拾貳円六十七銭

大祭に付諸入費

神社の建築は宇佐八幡によつて代表される八幡造り

であり前後に並んだ拜殿、本殿を一つにつないだ形式で仏教建築の双堂という形式が採り入れられたものだという。

前後の建物をつなぎ中間部を幣殿と呼び、前後の屋根の軒先が接するので横に樋がわたっている。神域にみる屋根の曲線や太鼓橋の反り、石疊の參道や御影石の大鳥居、石灯笼、こまいぬ(阿形と吽形、鑄鉄製)等の配置も映りよく、その建築美と雰囲気は古風を伝えている。

古老の話によると震災以前前の社殿は現在に較べると小振りであつたという。

尚隣組の諸掛帳をみると大正元年より昭和七年まで祭礼費として大人の神輿担

ぎ人足割当二名日当二円五十銭と記されている。

大人の神輿の奉納時期は判然としないが隣組の諸掛帳から推算すると明治の末期ではなからうか。

子供の神輿は昭和初期に長安寺參道入口の左角にあつた小野晴運送店(小野晴治氏)が始めての男子誕生を祝つて神社に寄進したもので村内の指物師瀬戸勝之助氏の作である。

少年の頃、瀬戸氏が大通りに面した作業場で神輿を丹念に組み上げていた姿が思い浮ぶのである。

昭和十年代に生きた村人たちはどのように考え、どのように行動してきたのだろうか。

隣組の戦時下の例祭に関する記録をみると昭和八年から十一年まで神輿担ぎ人足割当式名日当三円と記されている。

昭和十二年、十三年は休祭、昭和十四年、十五年は人足割当二名、日当三円四十銭とあり、尚、昭和十五年は、内務省の強制により全国が町内会、隣組の小単位に分けられ整備、組織が強化されている。

昭和十六、十九年は休祭、日支事変以降戦線の拡大に伴い村の若者たちは次々兵役に服したので老人や女子供たちが銃後の守りを固め、昭和十八年には学徒動員が始まり多数の学生が戦士として動員されている。

男子は二十才になると徴兵年令であり、大正十五年生れまでが軍服を着たのだが、出発に際しては必ず神社に武運長久を祈り、滅私奉公を誓つて戦場に旅立ったのである。

昭和十七年四月の本土初

四 十五年戦争と神社

空襲以降、村内の空気は漸次緊迫感を増し、空襲の恐怖や生活物資の窮乏する中で、敗北への道が始まり神社の例祭を執り行う余裕はなくなつてきたのである。

昭和二十年八月終戦を迎え、中国大陸や南方方面、東南アジア、シベリヤ等各方面からの引揚げが始まつたのだが「復員」という聞き慣れない言葉を耳にした。

子供の頃から軍国教育を受け、出征以来のちは国家のものと考え死を恐れず神州不滅を信じていた故か神社に無事帰郷の報告をすることもなく、ひっそりと帰宅した。

生命永らえての帰国だが待ちわびる家族との連絡はとれず、小田原駅へは出迎

えもなく凱旋帰郷の歓迎に比べると、天地雲泥の差でありその惨めさを沁々と味

わつたものである。

明治以来、兵士の送迎には必ず神社に参拝してきたが終戦によりこの伝統儀礼は終息した。

試みに日支事変当時の井細田区の決算書を繙いてみると、軍役に服した区民の実態が手に取るように見えてくるのである。

●昭和十四年支那事変出征兵諸入費明細

。戦死者金四円也 五月八日中支にて名譽戦死す 盛菓子一

対 中戸川六三

金拾円二十銭 七月二十四日

一柱(遺骨)富士駅まで謹迎

に副区長在郷軍人四名旅費

金參円也八月七日区より香料

金五円也 区より花輪

金老円八十銭

八月十四日新盆に仏參

合計計二十四円也

。御帰還兵御祝(金三円也)

三月二日小田原駅着(以下同一に付省略)重砲兵中野教

広。五月二十六日歩兵 善波

久作。七月十七日 重砲兵 杉

崎周平。七月二十二日 重砲

兵 府川政三。十月十九日 特

務兵 石川朝蔵 合計五名(金

十五円也)

。戦傷兵見舞

金三円也 岡部信忠

合計三円也

。出征兵餞別(金五円也)

四月三十日 歩兵長野金次

五月十一日 同 中戸川正三

同 諏訪間信之。八月二十日

同 美濃島国夫、同 古川弘

二。八月二十五日 同 渡辺永

之助。十一月二十四日 海軍

横溝利三郎。

合計七名(金三十五円也)



材木屋綺談 その三

たかた・きくせん

近頃、あらゆる商品にブランド製品なるランク付けが行われている。たとえばお米の「コシヒカリ」「ササニシキ」のように。ところが杉の木には昔からブランド名がつけられていて、誰でも知っているのが「秋田杉」に「吉野杉」である。しかし素人の人にはこの区別が簡単

には見分けられない。秋田杉はもろろん秋田県が産地だが、江戸幕府時代この地の藩では杉林を神聖なものとして伐採を厳禁した。そのため三百年以上を経た今日、秋田杉は得難い銘木となっている。第一番に色が美麗である。ピンク

杉にもあるブランド 全国各地の銘木杉

いか重厚さに欠ける。秋田杉ほどの大径木材が少ないからであろう。このようにランク付けには樹齢の長短が大きく作用する。簡単に言えば樹齢の古いほど美麗な肌が出す。ところが樹齢の古い杉は色がピンクでなくとも別の効果があった。銘木屋が争って探すのである。たとえば九州の薩摩杉とか霧島杉は木肌が灰赤色である。しかし千年に近い風雪を経たこれらの杉は灰赤色のうちに見事な本目が隠れていて、これを製材すると千変万化の模様を現出する。これらはいずれも産出高が希少なため銘木屋にとっては垂涎ものである。

長樹齢の杉と言えは一般によく知られているのが「屋久杉」である。数千年の樹齢というこの杉の本目は複雑怪奇とも言うべき素晴らしいもので、これを天井板にすると最高値に売れるのである。もっとも今日では超希少であるから、紙のように薄くスライスしてベニヤに貼りつけたものがほとんどである。銘木杉のブランドには以上の外に春日杉、深山杉等々たくさんあるが、それは亦別の機会に譲る。いずれにしても日本の産物にはこのような自然物をとってもさまざまな貌を見せてくれることに驚き、日本文化の多様性と関連があるのではないかと大へん興味を惹かれるのである。(続)

。入管兵饒別(金三円也) 四月二十八日 歩兵 石井伴次郎。九月十八日 特務兵 石川金次。十一月三十日 歩兵 成宮 勇。十二月九日 歩兵 栢沼軍次、同 藤江和也。 合計五名(金拾五円也) ●昭和十五年支那事変 諸入費明細 入管兵饒別(金三円也) 二月二十七日、小糸欽弥。 三月三日 小野亀太郎。十一

月三十日 山崎稔。十二月十六日 星野幸一、臼井重治。(昭和十六年) 一月九日 岡部忠夫、近藤正男。一月十日 石塚康三、佐野豊治。 合計九名(金二十七円也) 出征兵饒別(金五円也) 一月十八日 歩兵 本多三郎。 四月十二日 同 相原武雄。 四月十四日 同 大川孝太郎。 八月二十七日 同 府川貞夫。 合計四名(金二十円也)

。帰還兵御祝(金三円也) 一月二十九日 下沢一憲。 二月十三日 中戸川忠吉。 二月十五日 秋沢彦太郎。 二月十七日 片岡章吾。 二月二十四日 太田茂、日比野幸太郎。 三月三日 岡部信忠。 三月十三日 鈴木清吉。 三月二十五日 和田仁太郎。 四月十八日 皆木銀兵衛。 五月九日 諏訪 間信之。 五月三十日 星屋善藏。 七月一日 大木辰五郎。

九月六日 鈴木治雄。 杉山清吉。 十月三十一日 石川金次。 十一月五日 松山 正。 合計十七名(金五拾円也) 五 終戦と政教分離 昭和二十年十月十五日占領軍が発した神道指令により、神社の維持管理は自治会から、氏子会へ転換を命ぜられたのである。 G・H・Qの指令は国家

と神道の徹底的な分離を要求したのである。国家と結合したのは神道以外になかったから分離さるべきものとして、想定された宗教の中心は神道であった。 長年に渉る祭政一致の慣行から当初は政教分離の意味が理解出来ず、具体的にどのように改革すればよいのか解らず、氏子会を結成するまでには若干の時日を要したのである。勿論信教の自由から加入は任意であった。 神社の維持管理は区費によらず会員から徴収した会費と寄附金等で賄うことになり、公的行事と宗教行事は一線を画して政教分離のシステムが定着したのである。 敗戦による混乱から食糧難の苦しさ、軍国主義への反動から神仏に対する不信感が台頭、或いはアメリカ式の民主主義がたたきこまれた中で経済の復興は進み人々が忘れていた古来の祭事が暦の中に甦ってきた。 戦後の一変した精神風土の中で、宮参りと七五三詣だけは美しい風習として復活したのが早かった。昭和三十年代に入ると戦後の経済復興は終り、家庭の電化生活も始まったのである。(続)

生まれてから 教員生活まで

飯田和ツヤ子

私の生家

「三竹、矢佐芝、芋食って死んだ、栗の一角丸で又生きた」と里の者と喧嘩すると、このように歌いはやされたほどの山村に生まれた私である。大正十年八月十一日、小沢為之助、ふじの七女として戸籍に記されているが、実際は兄弟合計十人あったそうだ。生後間もなく死亡して戸籍に記されない子もあったとか、私の知っているのは、兄一人姉三人私は末っ娘であった。

竹どいで私の家まで送られていた事を覚えていて。こんな状態ですからお風呂など三日も四日も同じ水を沸かしたものだ。

又、向う三軒両隣りには「今夜家でお風呂沸かしたから入りにきて」と言い廻り、大下の家はお湯を存分に使って流すことが出来、その隣のタマちゃんと一緒に入った懐かしい思い出もある。今ではこの地は南足柄市三竹で暮しもよく、自家用車、オートバイ等もあり市の水道も引かれ、昔の面影はなく、「三竹よいとこ一度はおいで、花の小田原下に見る」と言われるほど快適な生活ぶりである。

分教場時代

小学校は岡本尋常高等小学校で塚原にあり三竹は僻地なので分教場が置かれ、三年生まで過ごした。一つの教室に二人ずつ座れる机が五つ六つ三列並び一列目が一年生、二列目二年生、

三列目三年生と合計三十人前後の児童数だった。和田ヶ原より若い男の日比野伝造先生が通ってこられた。教室の右側に先生の事務机と戸棚があり、その隣がいろり端で大きな鉄瓶がじざい鍵に吊さがっていてお湯を湧かすことが出来た。

寒い冬の日、このいろりを囲んで足を投げ出して一級ずつ勉強した懐かしい風景が今でもありありと浮んでくる。

三年生まで一つの教室なので、学習の過程が手にとるように聞える。一年生の時から九々も掛算割算も覚えてしまった。今考ええると才能教室でもあった。唱歌、体操は一緒の時間だったの

で二つ上の姉と一緒に歌ったり遊戯したり嬉しかった。恥かしいやらだった。

三年生の時、忘れもしない思い出がある。馬のカイバを切る仕事をして、押切りで右手の小指の先を切り落とす寸前、血だらけになりお医者さんに連れて行かれ、五針縫って物々しい包帯を首からして帰ったこと、その為三年生がする教室のお掃除も免除されて監督する立場になった。友人から「おらも怪我をしたいなあ。」

なんて私の痛みも知らず、つらい思いをした。今でも小指の先が一寸曲っている。

馬のこと

家にはホマレという名の立派な馬がいた。競馬に出ると、いつも一等で長い布の旗を貰ってくる。それで着物や長襦袢など作ったり、ふとん皮にしたりして利用されていた。床の間の横の欄間に賞状がかゝっていた。

賞状

馬 主 小沢為之助
ホマレ号 騎手 勝俣 惣吾
右は秋季松田競馬場に於て優秀な成績をおさめたので賞状及び賞品を授与する。

という文面の賞状が天皇皇后のお写真の次に大切に

かざってあった。他に功績のある賞状もない無学の父のことであったから、この馬は何よりも自慢なものであったに違いない。

一文あきないの店

私の家は農家のかたわら一文あきないの店をやっていた。入口のガラス戸に、菓子、煙草、荒物、雑貨、其の他品々と赤いペンキで

書かれた文字は、近所にお住居の照心書道の大家、高橋竹村先生の肉筆だった。其の他品々とは兄弟でよく苦笑したものだ。

お菓子は塚原の神戸菓子店より木箱に入れて本校へ通う帰りに持ってきたものだった。百錢(今の1円)銅貨をごろんぼに丸めて百錢持って行くと、百五十個の菓子が入ってきたのである。箱をゆすり動かして無理に割ったお菓子は売れないので食べたこともあり悪知恵を働かせたものだった。

煙草は米久さんの煙草屋さんへ小田原の専売所より月一回配達に来て、そこから大きな風呂敷に包んで(ヤセ馬)という背追いはしごで背負ってきたものである。こんなお使いお手伝いなど今の子供には考えられないことだろう。

荒物雑貨は父が多古の商店より、リヤカーで仕入れてきたようである。今でも兄が、お店を続けて居るが、近く全部やめてしまうとかなんて言っている。若い者はサラリーマンで、こんな商売はいやだろうが、私たち姉妹が実家へ用事があって行っても、お店にはアイヌもあるし、おいしいお菓子も、



隠岐威重画

かんづめも色々あるので食事はすぐ出してくださって便利だと思ってる。

教員志望試験

小学校六年卒業では、奥津医院のお嬢さんが一人小田原高等女学校に入っただけだった。何せ教育には無関心、又経済的にもゆとりのある家だったので高等科に進んだ。高二になると教室の隅にオルガンがあった。これを弾いても叱られない。教わった歌を右手でさぐるとメロディーが出てとても楽しい。昼休みも殆どオルガンにかじりついた。運動

は不得意だったのでオルガンを一人じめにしていた。皆が「先生になれるよ、ツヤ子さん。」と言ってくれたのを本気にして教員になりたい気持ちになった。

秋の運動会が終り私の進路の事につき受持の先生に姉が話したらしい。師範学校に入れば月謝はいらない。就職して何年か勤めればよいとか……そして十月より残り勉強が始まった。一対一で特別勉強をした。秋で日が短い。それに僻地故そう遅くまで残るわけにもいかず毎日一時間位しか出来なかった。

一月より初潮があった。二月に師範学校の試験があった。母方の親戚に横浜の小学校の先生をしている小沢水重という人がいた。ここへ泊ることにして兄に連れられて試験を受けに行った。その時運悪く生理だった。まだこの事になれていずシヨツ

クだった。

試験場は横浜の立野女子師範の校内だった。受験番号は一五二番だった。三十人合格という狭き門、その中横浜より十五人、地方より十五人という難関。当然不合格。着物をきている受験生は私ぐらい、毛糸のセーター、セラー服など私にはなかった。見るからに田舎者、体操のテストは全然無理、見事落第。

それで行く学校は、足柄実科女学校か新名高等家政女学校ぐらい。後者は本科二年に編入試験をして高等女学校卒業資格となるというのでそれに決めた。六年卒から入学した人より高二から編入して入った人の方が成績はよかった。卒業したのは昭和十四年三月だった。

代用教員 正教員講習

卒業と同時に、その頃小学校教員が不足しており代用教員を採用するという事を知らせてくれた知人、県の学務課勤務の露木良英さん(奥様が上の家から嫁がれた)に依頼して女学校の成績表を提出し、面接を受け、代用教員に採用された。普通代用と期間代用とがあっ

た。私は普通代用で月給参拾参円、足柄上郡桜井尋常高等小学校に奉職することになった。念願かなって教員になり一年生四十人ばかりの受持ちとなった。

当時十七才だった。家から一時間余りの徒歩で、おそい時は母が提灯をさげて迎えに来てくれた。今のようないいよ舗装された道路ではなく、道巾も狭く両側から木の枝がおいかぶさった昼なお暗い所も何箇所があった。道はでこぼこぬかる道、夜はキツネ、タヌキの通る道といった様、西念寺の森から人玉のような光がふわふわと浮かんでいるのを見た時は、身体がぞくぞくと寒気を覚えることもあった。

一年半通って、代用教員では将来肩身が狭いので十月より尋正講習に鎌倉の男子師範へ通うことにした。桜井小学校の校長先生がおっしゃった。

「ほんとうに惜しいが貴方の将来のことを考えると仕方がない。講習が終わったら又この学校に来てほしい。」私は返事が出来なかった。なぜかというと、通うのが遠いから。

尋正講習は鎌倉まで、家から徒歩、電車、汽車、乗

りかえ二回、連絡よくても二時間以上かかる。でも一生けんめいだった。汽車の中でもよく勉強した。乱視になって眼鏡をかけるようになった。

「女が眼鏡をかけると嫁のもらいてがない」と父に言われたこともあった。いよいよ講習も終りに近づき一番心配なのはピアノの検閲であった。家にはオルガンもない。細長い紙に鍵盤をピアノ同様に書き、音も出ないのに每晚指の練習をしてどうやら合格したのも苦しい思い出、今では我が家も嫁が持参したピアノで孫が上手に弾くので私などとても手も出ないほどだ。

正教員となって就職先を頼むことも知らず遠くへ行けるものと思っていたら「横浜市山下小学校」に辞令が出た。友人が「きつと山下公園の近くよ。」と言った。

三人ばかり同じ赴任の者がいた。揃って挨拶に行くことになった。

横浜駅―東神奈川―八王子線山中―徒歩十五分、それはそれは不慣れた田舎、私の家の方と変りない位、どうしよう?こんな所

へ通えない、一人の女の人は近くの人らしく道案内、もう一人は男の人、二宮の人、通うらしい。私はどうしても通えるわけがない。家から三時間半ぐらいかかるので下宿をさがしていた。だより他に方法がない。家に帰り父母、兄と相談下宿する準備にとりかゝる。一週間しか余裕がない。山下小学校の小島先生という女の方の計らいで下宿

をさがしていただき四月始め兄に連れられ、布団衣類等手荷物で赴任した。

下宿生活

下宿は農家のはなれ、若夫婦が下において二階を借りることになった。若夫婦は横浜のデパートに勤めている。娘さんがいて私とよく話してくれ、寝るまで部屋にいてくれたこともあった。この学校でも一年生の受

郷土のむかしばなし

Ⅱ むかしばなしを語り残そうⅡ

西山銚太郎

一 猪狩り

昔曾我谷津に公右衛門と云う人があった。公右衛門は力自慢で度胸がよく、だから恐ろしいと云う事を知らなかつた。

或る時、鉄砲を持って裏の曾我山へ行った。すると前から大きな猪が来たので、ねらい定めてズドンと一発撃ったが、運悪く外れてしまった。猪は荒れ狂って牙をむき出し、公右衛門めがけてまっしぐらに突き進

んで来た。

しかし、公右衛門は少しも恐れず、口をあけてとびかゝろうとする猪の口へ、鉄砲の台尻をヤツと突き込んでしまった。猪はいっそう荒れ狂ってあばれたが、

公右衛門は左手で鉄砲を持ち、右手で次の弾丸をこめ、両手で持って銃口を猪の口の中に入れ、ズドン。山に銃声が轟くと同時に、小馬程の猪はドタリと倒れ

持ち、五時頃になると昏帰ってしまふ。下宿に帰っても用がない、日が長くてもてあましてしまふ。家が恋しい淋しい、一ヶ月でつくづくいやになり、五六七と三ヶ月、最も日が長いので家から通うことにした。四月の月給では定期券が買えないほど高かった。八月は夏休み。九月から又、下宿しなければならぬ。前の所を頼むことも出来ない。てしまった。

二 天狗さん

公右衛門はフト悪い心を起こして、夜中にソツと起き出し、わらじをはき鋸と鉋を持って裏山へ行った。屋間見て置いた林の中の一番よい木の根元へ行き、鋸でズイコンズイコン切り始めた。もう倒れる頃だと思つたが倒れないので、又切り始めた。鋸がスルリと反対側へ抜けてしまうのにまだ倒れない。公右衛門は「変だな、廻りの木にでもつかえてるのかナ」と思いつゝ上の方を見た。

そしたらどうだろう？ 闇夜にくっきりと見える高い鼻、まっかな顔まっ白い髪の毛や長いひげ、云わずと

学校の隣にお寺があり、お大黒さんと二年生の坊やと二人きりなので私を下宿させてくださった。

お寺なので木々が沢山あり、お墓も見え一寸淋しいと思つたが、仕方がなく定めた。

朝晩のお経も少しばかり覚えた。お大黒さんの作られる食事もしゃれていた。盛りつけも素敵で、チャーハン等も教えてくださって

知れた天狗さんが、白いはな緒の高足駄をはいて空間に立ち、片手にうちほ、片手で木の頭をしっかりとおさえ、金色に光る大きな目で公右衛門を見下ろし「公右衛門、ワレ(お前の事)は何をするのだ」とその声はあたりに轟く程の大音だつた。

さすがの公右衛門もびっくり仰天して、道具を投げ出し道も鼻もあらばこそ、たゞまっしぐらに我が家にとどり着き、わらじのまゝ布団の中にもぐり込み、三日三晩震えたと云う事である。

色々料理を覚えたのは収穫だった。

この稿は、飯田和ツヤさんが受講の、平成元年秋に開かれた小田原市教育委員会主催の成人学校「自分史を書く」講座のまとめである。手書き文集に寄せられたものです。

飯田和さんの率直に述べる体験は得難いもので、また、今とは全く異なる戦前の時代の背景を織り成した作文として立派なものです。一部の人が知るだけでそのまま埋れさせてしまふのは惜しいと思われまふので、再録いたしました。(澄)

伽話の様なつもりで聞いて居たが、子供への話としては面白いと思つた。後に分政年間の書類を見たら、「谷津村百姓公右衛門」と云う名前が出て来た。

これで此の人は実在の人物でこの話は本当だと思つた。子供に聞かせるには、「昔は本当に天狗さんが居たのだ。九月のお祭りには今でもおみこしの前に天狗さんが行くではないか」と云うのも面白いと思う。

|| 祖父室田義文を語る || 『ばあばのくりごと』

福田綾女史の力作を読んで

文と絵 隠岐 威重

この本は僅かの部数しか創られなかったので多くの人の眼にはふれない。

綾女史の考えで身内の、それもお孫さん達に室田家(女史の生家)の生立ちを知らせようと記したもので、他人の眼にふれることを好まなかったからだ。その書かれた筋は大体三つの場面に分れている。

初編は女史の母親、そで女の小田原の老人ホームでの最後の様を女らしい豊かな感性で述べている。今はもう少ない上流の世界が、気を張らずに、母を恋い思う情が、暖かく織りなして美しい筆跡を示す。私小説、個人の慕情の世界、文学的なもの、中里恒子の画く世界だと思つと大体通じる。だが、史談の視野からは遠い。

二編、三編になると舞台は大きく廻る。
女史の祖父室田義文を語

る段になると世界ががらりと変る。少しあら筋をたどろう。

「祖父室田義文は生涯に二回暗殺事件に遭っておりまず。

第一回は万延元年(一八六〇)三月三日、江戸桜田門で起きた井伊直弼の暗殺。

二回目が明治四十二年(一八七〇)十月二十六日、ハルピン駅頭で起きた伊藤博文公の暗殺です」



と、読者の心を鋭くえぐるものがる。

室田義文は弘化四年(一八二〇)九月十九日、江戸小石川の水戸徳川家の藩邸内で、

藩士室田平八、かねの間に生れ、幼名を一次郎と名付けた。当時、男子は七歳になると水戸に下り、弘道館に入る藩令に従い文武両道を修めた。水戸にいた二年間は義文のその生涯に強い影響を与えた。義文は綾女史の母方の曾祖父金子孫二郎に出会っている。金子は

水府の郡奉行で桜田門の変の首領であった。

沸騰する幕末の大渦、その一つの渦、桜田門の変。北の露国から開国を迫るプチャーチン。それに遅れじ

と江戸湾に入るペリー、自国の大統領の誕生を祝う大砲の轟きで幕府を脅かし開国に同意させた。

孝明帝の許しなく開港を約した幕府、それを詰る帝側、攘夷、開国の大波が全国を覆う。

帝が発する幕府詰問の勅。その同文の別勅が水戸徳川齊昭にとどき、全国の藩に廻覧し、幕府の非を問えと。

井伊直弼は長兄彦根藩主直亮、続いて嫡子の急死により彦根三十五万石の当主になり、ついで幕府の大老に納まり幕政を司る。

その直弼、幕府が米国と苦しまぎれに交わした条約、それに反抗する勢力、特に桜田門での直弼暗殺にと発展して行く。

金子孫次郎は直弼を倒した後、関西に行き攝津で捕われ(薩摩藩士との連絡不十分で)江戸に送られて誅された(後明治の中頃、新政府より高橋多一郎と共に正四位を贈らる)。

この辺が義文青年の人格形成期だ。明治二年(一八六九)藩に無断で新政府に出所、外務大丞丸山作樂に従い樺太視察(露国と漁場交渉)に行く。後、外務省の洋語

学校に入り、英佛語を学び、以後外交官の道を歩む。たまたま同校を視察に来た工部大輔伊藤博文が、義文の水府出を知り、興味を示し公邸に呼び以後の訪問を許した。漢詩好きの博文は、

桜田門の変の一方の首領高橋多一郎(室田家とは縁続き)の漢詩を好み、水戸には特別の思いがあり、それを義文にそゝいだのか。その後、博文と義文の交わりは明治の四十二年十月、ハルピン駅頭での公の最後に立ち合うまで四十年間続くのも何かの縁か。

明治五年(一八七二)、正八位に叙せられ正式に外交官の道を歩む。以後、桑港、メキシコの領事に、その後

は朝鮮・清国を舞台上活躍する。

明治十八年(一八八五)、博文・西郷従道は韓国問題協議で清国に渡る。義文も随行、李鴻章と交渉した。写真の書はその時、李が義文に贈ったものか。

朝鮮半島は今も昔も動乱の種を蒔いている。

日清・日露の役も半島問題が遠因だ。

この半島、それに続く大陸が義文達の活動の場になっ

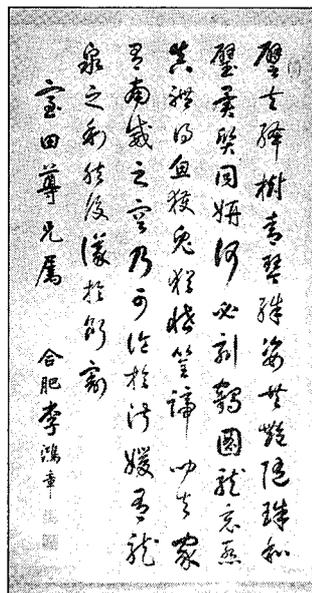


肖像画 室田義文
中村 舞 画

た。
そこに正史に出る頭高官とは別に、玄洋社(社長平岡浩太郎)出身に筆頭頭生頭山満・杉山茂丸・内田良平・金子堅太郎・栗野慎一郎・三井の団琢磨・異色の外交官山座円次郎・国際法の寺尾寿・亨兄弟等多士落々だ。義文はこれ等の何人かと交わる。
正史の高官、裏史の実力者が入乱れての活躍の様を本誌に写してみたいが、ここに詳細する余地はない。が、杉山茂丸、内田良平、山座円次郎達の動きはめざましく、以後の日本の道に良くも悪しくも大きな影響を与える。

二次、三次の条約改訂により内容は次第に厳しくなる。貨幣制度、土地所有の制限、軍隊の解散等々、抗日、反日の波は全土を覆っていた。
条約改革により統監府を置き、その初代の統監に博文はおされた。彼はどちらかと言えば寛大な考えであったが、実務はそれを許さず、韓国民は酷政の枠にしめあげられていった。
安重根の場合。明治十一年黄海道海州府生れ、同地の大地主、カソリック信者。日露役後の日本の仕打で財産を十分の一に減らした。その元凶は日本を代表する伊藤博文と信じ込んでいった。軍解散後ロシア領にひそみ、シベリヤで挙兵、二百

名を募り慶興郡に戻り日本兵と小争いをした。明治四十二年(一九〇一)十月ハルピン駅頭で伊藤公暗殺。翌四十二年三月安重根の死刑が執行された。
その五ヶ月後八月十二日に韓国は日本に併合さる。話が少し進みすぎた。ハルピンの伊藤の最後を少し記す前にハルピンについて触れておこう。
ハルピンは、明治三十年まで地図上になかった。同年に清国と条約を結んだ露国は黒竜江の北側を走るシベリヤ鉄道の南側、チタカから満州里・ハルピン・綏芬河を経てウラジオへの近道として東清鉄道造った。この線がスガリー(松花江)をまたぐ網干場(ハルピンの地で、其処から南下の鉄道が長春・奉天・大連へと下っている。この東清線はシベリヤ鉄道に合し、モスクワを経て西欧の中心地パリまで通じている。そのパリにも劣らぬ街をこの清国の北の片田舎に築こうと努め、僅かな間にその網干場あとが美しく、少しバタ臭い街に変わっていった。
その地で博文は露国の実力者ココフツォフ蔵相(後



室田義文に贈られた李鴻章の書

首相)と東洋平和について会談することになっていた(この会談は後藤新平がセツトした)。
随員には、貴族院議員(宮中・錦鶏間祇候)室田義文、式部官・公秘書官古谷久綱、陸軍中将村田惇以下六名が従い、途中長春から満鉄総裁中村是公、大内閣東郡督民政長官が加わった。その旅程を見ると、明治四十二年(一九〇一)十月十四日大磯を発つて十五日下関に一泊、十六日鉄嶺丸で門司港を出帆、十八日大連に入港。二十一日旅順を発ち二十五日長春へ到着、その日にハルピンに向い、特別列車は予定通り二十六日九時ハルピン駅に到着している。
なお、二十六日早朝、義文は博文に次の詩の保管を依頼されているが、はからずも絶筆となった。
萬里平原南滿洲
風光瀾達一點秋
當年戰跡止餘憤
更便後人牽晚愁
プラットフォームに待ち受ける露国、清国の官憲、各国領事に挨拶をすませると、ついで閱兵に移った。そのときに狙撃されたのである。十時には絶命したというが、この九時と十時の間に公は彼岸への旅に出たのだ。
なお、この事件では公に三発、随員数名も受弾、義文も足に弾を受けながら公を支え公と最後の固い握手をした。公は半時後息を止めた。その死の直前に苦しい息の中犯人は韓国人だと告げると、小さな声で「馬鹿な奴だ」ともらしたとか。

弾の数、弾種、飛来の方向等から狙撃犯は安重根一人だけとも考えられぬが、明確な答は中々出ない。ケネディの暗殺の場合も。政治(公の当時の政治的迷走)がからむ暗殺の場合、その背後が必ずしも明確にならぬことはやむを得ぬと云っては言いすぎか。

なお、安重根は現在韓国では救国の英雄として敬せられているとか(筆者追記)。

義文は、晩年外務省を退いてからいくつかの会社へ迎えられ、生き甲斐のある生活を送った。

そして彼は、益田孝の招きで、小田原天神山の益田の掃雲台の隣りに移ってからは、益田の後輩の三越社長野崎広太と三人で、毎日お茶と花札で遊んでいる。

また彼は、九十歳近くなっても、なお矍鑠として、一人で東京・小田原間を往復しては、各会社、議会(貴族院)、交詢社に向いた。会社の連中は、「あの爺さんに度々来られては叶わぬ」と、いわれる程であったという。

このことについて、綾女史は、「豪放でいて律義な

処もあり、ユーモアを解した祖父でしたが、年齢のなせる業で、皆さんに結構な厄介をかけたことと思います」と、言われる。

室田義文の略歴

正四位勲二等

本籍

東京都麹町永田町一三

弘化四年(一六)

江戸小石川水戸徳川藩邸に生れる。

明治二年 外務省入省

同三十三年 退官

同三十四年

貴族院議員 錦鶏間祇候

同三十四年 同

下関百十銀行社長

同四十三年以降

北海道炭鉱汽船(取締役)、

日魯漁業(取締役)、

三共製菓(取締役)、

日本徴兵保険(社長)、

内国貯金銀行(社長)、

日本不動産(社長)、

日本製鋼(社長)、

鐘淵紡績(監査役)、

朝鮮銀行(監査役)、

浜松・常盤銀行(相談役)、

日本郵船(顧問)、

南米拓殖・共同保

金(監査役)、

水戸徳川家(顧問)

昭和十三年九月五日逝去



筆者後記

筆者も女史と諸白小路にある聖十字教会の花園幼稚園で、大正の大地震の頃共に遊び、第一小学校(六年生だけ)の同窓でした。黒ぶちの円い眼鏡をかけた大からの老人が幼い孫娘を左右に手取り幼稚園に通う姿を、あのお爺さんは偉い人だと人伝に聞き口をポカんと空けてその武骨な爺を眺めていたことをかすかに覚えていています。

明治・大正の影

幕末・維新を駆けぬけ、大正・昭和の始めまで経た水府(水戸藩)の人の足跡。
三井の益田孝と親交を得た室田義文、孝のすすめで隣地、湘南小田原の海に南面した地(天神山)に居を構えた。飛弾高山の奥から移した民家は三、四百年を

幕末・維新を駆けぬけ、大正・昭和の始めまで経た水府(水戸藩)の人の足跡。
大正の地震にも壊れなかった太い栗・檜・杉の巨木の骨組。茅ぶきの上をトタンで被っているが屋内は昔の姿が健在だ。
その中に飾る宝物(中国・朝鮮)、幕末の歴史を語る文書が無造作に在る。その宝物も重要な未得たものでなく義文の業績が自然に集めた物で好ましい。
その部屋の一隅を綾女史の夫君福田篤泰元大臣の足跡がかすかに印されている。

綾女史とは共に定年の齢になった頃、老人は唯のサラリーマンの退職だが、女史の夫君の福田篤泰氏が代議士引退後、主に小田原に居を移してから、幼・小児の頃を楽しく思い出し老後の交友を温めていました。

この本の出版も裏から応援した次第で、この紹介の稿を起した次第です。

きます。後、東京三多摩から立候補、長期にわたり当選、その間、総務、防衛、郵政の大臣を歴任された。こんな話も聞きました。佐藤内閣の時か？ 小笠原諸島、父島・母島の返還に、裏の主役を務め成功。その時佐藤首相から昔だつたら伯爵ものだぞと変な誉言葉をもらったとか。

「綾ちゃん、義文お祖父さんのこともいいが、ワンマン吉田さんの事、夫君の裏話も少しは書いたら」と水向けると、「亭主のこと

は女房の私は書きたくないわよ、でも、孫が書くと云っているから、資料だけは散らないように、茶箱一杯取ってあるわ」と笑っていた。

幕末、それに続く明治の埋れた話、特に水戸徳川の置かれた特殊な立場、桜田門のそれに続く天狗党の藩内の争いで殆どの革新のリーダーを失っていく藩内の荒々しい気風。そんな水戸の独特の視線で維新革命を見るこの本は又別の光を発する。いつかの日、全文を公開されんことを願う。

今ふりかえる

シベリア抑留(三)

さいとう 齋藤 理一

入浴と診断

夏服のままでも入浴し始めての冬をやっと過して春となった。この間に悩まされたのが「ホワイトチー」こと虱である。

シベリアの冬は零下一、三十度、時には四十度となる。洗濯した衣類を晒すと

虱は死んでも卵は残る。床へ入れば体温で孵化する。夜でも昼でも全身が痒くてたまらない。夜ベッドで裸になり濡襟を脱いでランプの灯にかざすと、血を吸った尻の赤い虱が蜘蛛の子を散らすように逃げる。誰の下着も虱だらけとなって、縫目の間は卵でキラキラし

ている。こうなると頭髪の中から腋の下、陰部の毛のあるところまで虱の巣になっていく。

こんな状態では作業どころではない。毛皮の衿まで卵だらけ、作業に影響が出てくる。ソ連側も何とか処理せざるを得なくなった。結果として入浴の実施となったのである。

さて、風呂に入れると小躍して喜んだ。だが、日本の浴場を想像していたが、名ばかりの施設で、予想とは大違い……。バケツ二杯の湯と洗濯石鹸が渡された。洗い場はとて寒く体を洗

うどころではない。顔を洗って石鹸を流す程度であった。それが終ると、頭に剃刀を入れられ、さらに陰部とわき毛を全部剃られ、並んだ姿は何とも格好のつかないものがある。次はきれいにたたんだ濡襟袴下が渡さ



⑩ 錦鶏間祇候 もと勅任官 給はなく、時どき錦鶏の間にこを五年以上勤めた者、または勲機嫌伺いをして、天皇の諮問に三等以上の者で、功労あるもの 奉答をする。麝香の間祇候の下を優遇して与えられた資格。俸に位する。

れた。今まで着用のものは一箇所にまとめられた。こんな入浴が何回か続いた。あとから聞いた話では、この衣類は死亡した戦友のものであったと言う。私は裸で墓地に埋葬されたのか

と思うと、全身が震えてきてしまった。ともかくこれで虱とお別れになった。

それからというものは、時おり体力検査が行われるようになった。

その始めての日、宿舎前に集合させられた。女軍医であった。久びさに見る女性である。中尉の肩章をつけていた。ズボンを下げ尻をまる出しにして女医の前に出る。どんな診察をするのかと興味をもったが、なんと女医は、尻をつまんで、その厚みを見るだけであった。皮下脂肪を検査する訳だ。その結果、A、B、C、Dと区別する。まるで肉牛なみである。A、Bは労働可、Cは軽労働、Dは保養施設に送られて体力の回復をはかるのである。

私はついに最後まで労働可であった。ついで、保養施設で出される「オートミール」にはありつけなかった。写真で見るシベリア抑留

平成元年三月六日付の朝日新聞に、

苦しい思い出シベリア抑留 — ソ連側撮影の極秘 アルバムから初めて複

写

という見出しで、その概要が報道された。

ソ連は戦後、シベリアに抑留した日本人捕虜収容所生活の模様を「歴史の記録」として後世に残すため、カメラに収めて、「帰還したラーゲリの中の日本兵捕虜」と題するアルバムをつくった。

今迄機密資料とされてきた、このアルバムを、朝日新聞が極東シベリアのハバロスク市で、その全ページの複写に成功したという訳である。

その後三月十七日、週間『アサヒグラフ』に「封印アルバム」一挙大公開(四十年)「シベリア捕虜収容所の日本人たち」を表紙にして、歴史の記録として発行された。

その内容から見ると「厳冬」「重労働」「飢餓」の三重苦として経験した我々の経験とはほど遠いと思われる。

食事、散髪、労働、娯楽、体操、帰国、学習、収容所などの写真が掲載されている。ソ連側がいつこの収容所で撮ったか分らないが、

ASAHI GRAPH 1989 通年刊 定価380円

アサヒグラフ 317

封印アルバム一挙大公開 40年

シベリア捕虜収容所の日本人たち

ソ連側撮影の極秘

ソ連の経済発展の成果を誇る豪華施設

図パンの歴史

シベリアにある捕虜収容所の正門。この写真は、普通の写真所と違って、収容所を出入りする者全員が写る。また、ソ連政府の姿も見えない。何人かのシベリア捕虜収容所に設置されたが、どこも収容所が特定できなかった。

収容所がほとんどに不満がわくまでの設備、夏は暑く、冬は寒かった。

ソ連の経済発展の成果を誇る豪華施設

写真を見るかぎり、最終帰国の二十四年のナホトカ附近の収容所であろうと想像できる。被写体の抑留者がいづれも元気で、収容所にしても、我々が強制労働させられたものとは違い、高い塀や有刺鉄線もない。ソ連監視兵の姿もなく、まして望楼なども見られない。ご参考までに。

丹沢の植物 ⑧

城川四郎

山の雰囲気は四季それぞれに趣があつて、どの季節が好きかと聞かれても返事に困る。しかし、丹沢山が最も丹沢らしい姿を見せるときはいつかと問われれば私は迷わず梅雨の末期と答えたい。丹沢山の真価はブナの原生林にあり、この時期がブナの原生林に最も生命の充実を感じるからである。そして、ひそかに私の心のなかにはこの時期でなければ巡り会えないある植物との出会いを期待している。その植物こそここに紹介するフジドリというラン科の植物である。この

「日本新聞」について

苛酷な抑留生活の中で、唯一の情報源となつた「日本新聞」は、我々もむさぼり読んだが、極秘資料とあつて、ソ連の厳しい監視の目をくぐつて、これまで日本に持ち帰られたのはごく一部だつたといわれている。シベリアの各収容所では、抑留二年目の昭和二十一年(一九五〇)頃から「民主運動」

の嵐が吹きはじめた。ソ連の編集指導者の下に、反軍思想や反ファシズム闘争を鼓舞する記事が掲載された。それは民主運動の名のもとに行われたが、共産主義思想の宣伝機関誌的な役割と共産活動の煽りと、ソ連盟強化と民主民族戦線の旗の元にとスローガンに掲げての啓蒙活動であつた。分所からも「アクチュ」

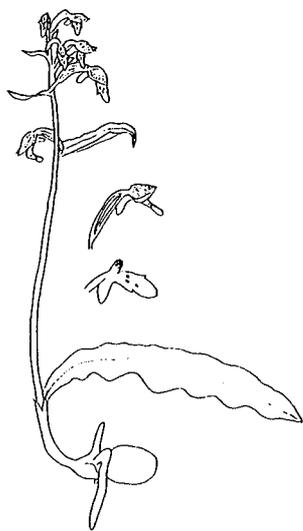
がハバロスクに派遣され、帰所後は輪読等の指導に解説説明等を通じて、大きな役割を果たした。一方、紙面には、中国の内戦やベルリン封鎖、朝鮮半島の南北分裂、日本国内の政治経済動向等が記載された。終戦直後の「コメよこせ運動」その他一方的通信を、どの程度信じるかも問題として考えさせられて

するブナの原生林のブナの大木の樹幹に着生しているが個体数は極めて少ないのでなかなか出会えないのである。神奈川県では丹沢山地だけに分布が確認されている。全国的には富士山、愛鷹山に知られており富士周辺固有(フォッサマグナ

要素)植物であると考えられていたが岩手県でも発見されたので学術的にいよいよ興味深い植物となつたのである。茎の高さが約八センチ、花は淡紅紫色で五ミリほどの長さがあり唇弁には紫斑点を持つている。

フジドリ (らん科)

Neottianthe fujisanensis
F.Maekawa



筆者原図

植物は決して美しい装いではないし格別に気品のある風情をしているわけでもないから観賞価値があるとはいえない。でも植物学上の興味だけではなく私にはその俗塵を嫌つて孤高に生きる姿がたいへん魅力的である。しかし、私は植物写真を撮るようになってからはまだお目にかかつていない。雲霧の去来

いた。ところで、平成元年三月十二日付の朝日新聞に、

シベリア抑留兵の情報源、幻の「日本新聞」明るみに——本社が全部撮影

というタイトルで記事が掲載された。

それによると、昭和二十年九月十五日の第一号から、二十四年十一月二十七日の最終号まで、ハバロスク市通算六百五十号が発行され、朝日新聞社が今回複写に成功したのは、この内一号から六百十六号まで、とある。四十有余年たった今、やがて発行されるであろうこの複写は、当時読んだ状況と現在の環境の中で、どのように読まれ、どのように当時が偲ばれるか、今から楽しみにしているところである。(了)

「日本新聞」の復刻版は、この一月、朝日新聞社から発行された。しかし、筆者の齋藤理一氏は、A型肝炎で倒れ、半年もの闘病生活も空しく、昨年十月不帰の客となつた。ご冥福を祈る。

紅蓮洞・坂本易徳⑥

岡部 忠 夫

官学の方は、日進月歩の文明の学問をどしどし輸入して、その余波が私学に及ぼんとする状況にあった。世がこのような状況であるのに「義塾は依然として義塾である」と、坂本紅蓮洞は表現している。

(前回稿再掲)

彼の「旧時の慶応義塾の作文」(『文章世界』明治四十年九月号)は、さらに続く

これが為に其の頃の或る先輩は義塾の前途を憂いて、義塾が学界の長崎たらんとするを恐るといった。蓋し、長崎が日本で最も早く西洋の文明に接触した地であり乍らに、横浜神戸等が開かれた後は終に開港場中最も文明に遠ざかってしまったと同じく、義塾が最も早く西洋文明を輸入したにも拘らず、其の学风が世に遅るゝなきやを憂いて発したのである。しかも其の頃の義塾は猶能く官学たる大学に對

抗して其の門を張り、生徒も其の抱負があったのみではない、実世界に立つに及んで之れを實行して、敢えて官学の者と軒軽なしに今日に及んだ。いわば、古臭き教科書非文明の教授法により養成されたものと、新しき学風文明流の講義によりて訓育されたものとが、実際の世の中に立って同一の結果を擧げたのである。

軒軽の「軒は車の前の高いこと、軽は車の前の低いこと。あがりさがり、転じて上下・大小・軽重・優劣あること」(『諸橋漢和』)で、義塾出身者が官学出身者と肩を並べて互角に実社会での活躍しているという訳である。

坂本易徳が、この一文を書いた、明治四十一年(二六〇)という、この年の七月、東京帝国大学法科大学に経済学科が新設されている。

義塾出身者が官学出身と同等の力を発揮してきたのは、主として実業界の分野である。東京帝大が経済学科を新設することは、福沢諭吉の、つまり義塾の実学教育と比肩するもので、官学がさらに充実する時代の動きと、坂本紅蓮洞は受けとめたのであろうか? まさか、それに刺戟されたのではあるまいが、ともかく彼は、母校愛と義塾で学んださやかな自負を込めて「旧時の慶応義塾の作文」の一文を記したと思われる。

については、坂本易徳が義塾に在学していた明治二十年(一八七)頃の東京の諸学校について見ると、

まず官立では帝国大学、大学院と文科・理科・法料・医科・工料の各分科大学に分れていた。

余談だが、戦後東大のトップを学長といわず総長と称した人がいるが、あるいは、大学院と五つの分科大学を総べる伝統的な言葉を用いたのかも知れない。もっとも、これは私の勝手の見当で、その点については確かめていないが――。ともかくこの制度は、初

代の文部大臣に就任した、森有礼による学制改革で、「帝国大学令」が制定されてからである。しかも、明治十年(一八七)来、東京大学という名称であったのがいかめしくも帝国大学と改められ、全国に大学というのは帝国大学一校に限られた。

帝国大学が東京帝国大学と地名が冠されるようになったのは、明治三十年(一八九七)京都にも帝国大学が設置されてからである。

なお京都に帝大が置かれたのは、生々しい政治が行われる地から離れ、アカデミックな学問に専念出来る旧都を選んだといわれる。もしそうだとするならば、明治の爲政者の慧眼には恐れ入る。

さらに次いでに記すならば、明治四十年(一九〇七)には仙台に東北帝国大学が、四十三年には福岡に九州帝国大学が設置され、明治末には大学数は四校となった。ともかく明治政府は、大学については極端な小教主義をとったのである。先の稿で記したように、早稲田大学や慶応義塾が、法令上大学として認可されたのは、

大正九年(一九二〇)大学令が施行されての事である。

ちょっと帝大について長く書きすぎたが、他の官学を挙げるならば、

軍閥系の学校として、陸軍士官学校が市ヶ谷に、海軍兵学校が築地(明治二十一年八月広島県江田島に移転)にあった。

や、格が落ちる官立学校として、本郷湯島に高等師範学校、神田一ツ橋に高等商業学校、霊岸島に東京商船学校、都下荏原に東京農林学校(明治二十三年農科大学として帝国大学に合併)があった。

これら官立学校の教育目標はいずれも、国家有用の人材の育成にあつて、その卒業生は、ほぼ、それぞれの分野でのエリートコースを約束されていた。

一方私学の雄は、福沢諭吉の慶応義塾と大隈重信の東京専門学校(後の早稲田大学)である。

ところで、坂本易徳は、慶応義塾出身者が官学出身者に比較して(勿論実業界で)少しも遜色なかった理由を、さらに次のように述

べている。そこには、彼の官学に対する拮抗意識が窺えるが……。

義塾の此処に至るは、其の主腦者たる故福沢諭吉翁の人格の感化や、其の訓諭や演説の影響があったのは無論であるが、其の實際の稽古授業に於ては、彼の隔週一回に行われた作文の授業が與つて最も力があつたと、余は断言する。

坂本が在学当時の義塾の作文授業は、義塾の専売ではなかつたと思われるが、その実施の仕方に特徴があつたのではないかと思われるが……。

作文の授業は、文法や表現上のテクニクを教える

のではなく、隔週土曜日の午前中三時間が宛てられ、生徒に同一の題を示して論文を書かせることであつた。その課題は一定の場所に掲示され、生徒はおのおの教室に戻つて文を作るのである。

当時はまだ模造紙が製造されていぬから、大判の和紙に課題を筆で書いて所定の掲示板にかかげたのではないかと……。

このような勝手の想像をするのも、私が中学に入學した一年のとき、坂本紅蓮洞がいう慶応義塾の作文と似通つた問題を出す先生に出会つたからである。勿論義塾と中学校では、その方法や出題範囲や、回答への要求度は異なつていよう。

その先生は、地理の担当で、生徒の間では、本名より、「ドッサン」と、ニックネームで呼ばれそのほうが通りがよかつた。試験は、いつも大上段に振りかぶつたような、大きな問題が出された。

一学期の中間考査で地理の時間が来た。試験監督は何先生であるか忘れたが、問題は、ガリ版でなしに、模造紙に筆太に書かれていた。問題を見つめて息を飲んだ。

「東京市の都市計画について説明すべし」

全く授業で教わらない内容であつた。一夜漬で覚えただのも全く役に立たなかつたのである。答は白紙だったから、出題名を覚えていたのだが、頭上にドッサンと積雪をかぶる思いだつた。

五年になつて再び授業を受持たれた。今度は「八公民」である。その試験に「国家が最高の道徳である所以を説明せよ」が出た。これまた答えられなかつた。それで覚えていたのだが、ドッサンは中等教員の免許状を独学で取得したと聞いている。由来、中学卒業ないし専検パスで中等教員

試験に合格して教壇に立つ教師は実力を持ったものと、生徒の間ではその学力に敬意を表するのが通り相場であつた。ドッサンもそうであつたろう。

ドッサンは教員免許を得るため地理の細部をそらんじたであらうし、また大きなテーマをも同時に勉強したのであらう。そして検定試験に模造紙に書かれた問題に出会つたのではなからうか。それは明治以降の試験出題風景を背負つたような感じがする。この試験方式は、戦後ある時期まで、高等文官試験、略して高文試験(司法、行政、外交とその験科目内容は異なつていたが、現在の高級公務試験がこれに当る)にも持ち込まれている。

ちよつと横道にそれたが、「旧時の慶応義塾の作文」では、漢学塾や何かの塾で行われる花鳥風月や歴史上の人物を論ずるのではなく、時勢の話題となる條約改正とか死刑廃止といった題が与えられた。

それ故、何年も変更されない教科書によって得た知識だけでは作文するときに

間に合わない。予めその知識を貯えておかなければならない。それは主に新聞と雑誌に頼り、この他新刊の書籍や各所の演説会で行われる演説で新しい知識を吸収していった、と紅蓮洞は記している。

義塾の作文は、当時一般に行われた、単に思想表現の言葉の使い方の練習にとどまらないで、知識をいくむに役立ち、義塾の生徒は作文には、第一に知識を要することを知つていて、ただ技巧や修辭のみで文章が出来るものでないと心得ており、たとえ教科書は旧くとも義塾の生徒は日進月歩の新知识を受ける官学者と相並んで社会に出ることが出来た。と、紅蓮洞は一つの誇りを持って記している。

慶応義塾の作文には独自性があつたかもしれない。明治十二年(六六)東京大学予備門(旧制一高)では洋学に偏した教育で、和漢の作文能力が低下しているのを憂え、和漢文章の主任教員をおき、作文教育の強化を計っている。しかしそれは、文法とか修辭に重きが置かれたのではなからうか。



(続)

古墳遍歴 (二)

小田急線に沿って点在する古墳群 (2)

飯田 悟 郎

小田原市久野^{くの}小字塚林を中心とする明神ヶ岳から東に延びる丘陵上に、最も下手の坂下窪にある一号古墳を別にして、総世寺裏の農道に沿った無名古墳まで、39基(昭和58年度 県教委 分布調査による)の小古墳が散在することは既にごぞんじでありましょう。

往時は百塚とも呼ばれ、相当数の古墳があったようですが、長い間にかかりの古墳が削平されて消滅し、また封土を失い、ほぼ完形を残すのは一号古墳と四号古墳の二つだけとなっています。

この一号と四号、石室の露出した十五号と前述の無名古墳の四つにはそれぞれ標柱も親切な説明図もあり行けばすぐにも分かると思いますが、その他の古墳は、封土を失って単なる砂礫の堆積と化したのもあり、雑木が生い茂った小丘状のも

巡らし、推定径六十米を越す県下最大級の円墳であったらしく、中世に経塚として利用されていた様子で、墳頂に本来埋納されている筈の写経石が多数露出していることから、表土が流出したとおもわれ、周溝底からの比高十数米に及ぶものと考えられ、二段からなる段築構造の可能性もあり、他の終末期古墳に比し、より古い段階のものであらうと見られています。

一号古墳は地図に示してありますように、小田急線

足柄駅、または、大雄山線

五百羅漢駅から徒歩で十分

ほど、小田原市営水道久野

配水池の門脇にあり、かつては王塚、または大塚とも

呼ばれた、現状では直径四十

米に近い腰高の堂々たる

後期円墳で、墳丘上からの眺めは素晴らしく、また酒

匂平野の殆どのところから

ものぞみ見られますが、小田急の車窓からならば、狩

川の鉄橋から登田駅までの間が一番でしょう。

二号古墳は、大体同じぐ

らいの大きさで、ずっと上手

にありながら、ミカン畑に

囲まれているだけに眺望は

きかず、のぞみ見られず、

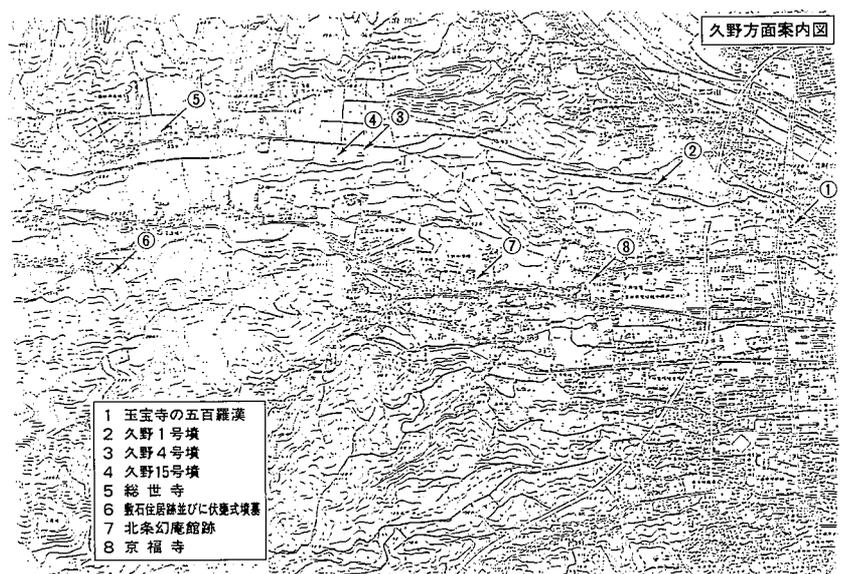
封土を剥ぎ取られて哀れな

姿を呈しています。人それぞれ好きずきでしょうが、

筆者個人はこの古墳群の中で此の二号古墳を最も好みます。但し、この古墳は所在の発見が難しく、また他の古墳からもかけ離れていますので、探索には土地の人に教えを請う必要があります。

四号古墳を含めたその他の古墳は、小田原駅から久野諏訪^{すわ}願^{ねん}行きのバスの乗り、

野諏訪^{すわ}願^{ねん}行きのバスの乗り、



総世寺で下車して徒歩五分ほど。円墳で底径二十米余、二段築成、南西に開口する横穴式石室を有する四号古墳は、昭和二十六年頃から久野遺跡調査会の有志の方々の奉仕によって発掘調査され、出土品は全て小田原市立郷土文化館に搬入され、一部は一般に提示されています。

十五号古墳は封土のみならず天井もなく、石室が露出してはいますが、却ってその方が古墳の内部構造を知ることが出来ましょう。この他此の付近に二十数基の小古墳があるのですが、何らかの予備知識をお持ちでなければ、既述のように古墳とはお分かりに成りにくいかも知れません。

郷水さんの句碑を建立、去る五月二十一日(火)同寺境内に關係者約二百名集まり、句碑の除幕式が行われた。頼朝の陣立石に飛花落花

◎天野宏さん(元小田原城内高教諭・日本数学史会員)は、水田温良が、嘉永四年(二五)大稻荷神社(小田原市谷津)と、慶応三年(二七)松原神社(小田原市本町)とに奉納の算額を

算額奉納 大稻荷神社



平成三年度総会

来年度から会費三千円に

増額分は別冊『小田原史談』発行の積立に

小田原史談総会を平成三年四月廿七日(土)十三時より小田原市立郷土文化館において開催。平成二年度の事業報告、決算報告、監査報告並びに平成三年度の事業計画及び収支予算が承認され、ついで会費を平成四年度から年額三千円とすることが高田会長から提案、承認された。増額分は、別冊『小田原史談』(仮称)発行のための積立及び『小田原史談』の充実のために当てられることになった。

『小田原史談』は今まで総括編として第一巻(創刊号)五〇

復元、去る五月十九日(日)両神社に奉納した。大稻荷神社奉納の算額は縦八二センチ、横一〇四・五センチの大きさ、松原神社のものは縦八五センチ、横二二七・六センチのもの。当時の奉納式には、小田原史談会からは高田会長、富田、和田両副会長が、他に日本数学史関係者、神社関係者らが多数出席した。

号・昭和四十五年一月刊)と第二巻(五一号)一〇二号・昭和五十六年五月刊)が発行されたが、これからは総括編は発行せず、主として既刊『小田原史談』の中から選んだものを取りまとめ、別冊『小田原史談』の発行企画をすることとなった。とりわけ、中野敬次郎先生の掲載された著述を一冊に集約して残すことは、資料的価値があり、大いに有意義と思われる。総会に引続いては、本会理事で元小田原市文化財保護課長・小田原市立郷土文化館長の山口

貢氏による「小田原の地名について」と題して講演が行われた。

事業報告、決算報告、事業計画、収支予算は次の通り

平成二年度事業報告

◇総会 平成二年四月二十七日

講演 「福澤諭吉と小田原」 講師 中大教授 金原左門氏

小田原市立郷土文化館にて

◇五月七日(月) 川越方面史跡めぐり下見

◇五月十九日(土) 久野古墳めぐり 講師 郷土史家 立木望隆氏

◇六月十五日(金)

今井・町田・網一色方面史跡めぐり

◇七月八日(日) 川越方面史跡めぐり

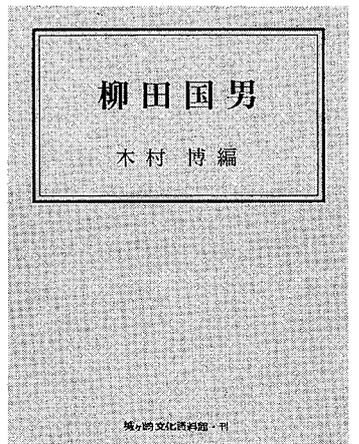
◇七月十一日(水)

北條氏遺蹟顕彰会主催北條氏政・氏照公四百年遠諱法要役員出席

◇七月二十八日(土) 北条氏四百年忌法要打合せ

◇九月五日(水) 沼田若原方面史跡めぐり下見

◇九月三十日(日) 小田原北条氏四百年法要と



などがあるが、このほど『柳田国男』を出された。

氏は学生時代に柳田国男にひかれ、卒業後も専攻の経済学とは全く縁のない

民俗学に踏み込んだ人で、柳田国男の恩顧を受けた一人として、柳田国男像を残しておきたいと、このほどまとめられたものである。

なお、立木望隆氏の『阿弥陀寺の弾誓さん』も収録されている。

B6版一二七頁千五百円 城ヶ崎文化資料館発行

会員 計 報

川口潤一郎氏(田島九丸) 昨年九月十七日逝去されました。享年八十四歳

香川智雄氏(大井町山田二六九) 本年三月五日逝去されました。享年九十二歳

小平信之助氏(栄町四一―一三八) 本年四月八日逝去されました。享年八十三歳。

ご冥福をお祈りします。

平成3年度 支出予算(一般会計)

収入の部

区 分	予算額(円)
前年度繰越金	109,176
会 費	900,000
市補助金	24,000
雑収入	2,824
合 計	1,036,000

支出の部

款 目	予算額(円)
庶務	222,000
總會費	25,000
会議費	45,000
会員連絡費	92,000
交際費	50,000
事務用品費	10,000
会員	127,000
振込手数料	2,000
名簿印刷費	60,000
名宛ラベル	50,000
事務用品費	15,000
企画事業	140,000
調査費	70,000
後援会費	50,000
座談会費	20,000
会報	515,000
会報印刷費	420,000
会報配付費	95,000
予備費	32,000
予備費	32,000
合 計	1,036,000

財産 積立基金 20万円
(定期預金)

平成3年度 編集委員会 予算

区 分	収入(円)	支出(円)
本会計より	420,000	
特別賛助会費	630,000	
預金利息	4,193	
前年度繰越金	2,807	
会報印刷費		900,000
編集費		78,000
取材費		35,000
会報発送費		35,000
事務費		9,000
合 計	1,057,000	1,057,000

平成2年度 収支決算書(一般会計)

収入の部

項 目	決算額(円)	付 記
前年度繰越金	60,841	
会 費	902,500	361人
市補助金	24,000	
雑収入	2,673	預金利息
合 計	990,014	

監査
木曾正雄

支出の部

款 目	決算額	付 記
庶務	204,037	
總會費	14,990	葉書・その他
会議費	45,461	会場費
会員連絡費	91,839	連絡費
交際費	49,000	慶事・その他
事務用品費	2,747	
会員	101,853	
振込手数料	1,400	振替口座
名簿印刷費	50,000	
名宛ラベル	50,000	
事務用品費	453	
企画事業	80,460	
調査費	28,860	歴史探訪下見
講演会費	40,600	
座談会費	11,000	
会報	494,488	
会報費	400,000	会報特別会計へ
会報配付費	94,488	普通会員分
予備費	0	
予備費	0	
合 計	880,838	

差引残高
990,014円 - 880,838円 = 109,176円
(総収入) (総支出) (差引残高・次年度へ繰越し)

平成2年度 史跡めぐり 支出決算書

月・日	名 称	人員	収入額(円)	支出額(円)	差引残
5・19	久野古墳群	41	0	15,000	△15,000
6・15	今井陣屋跡	34	0	(11,000)	
7・8	川越 方面	52	331,000	303,820	27,180
10・10	沼田・岩原	50	0	14,645	△14,645
11・8~9	長野・松代	32	864,000	859,526	4,474
1・20	富士宮初詣	36	252,000	279,310	△27,310
	預金利息		1,594		1,594
合 計			1,448,594	1,472,301	△23,707

176,922円 - 23,707円 = 153,215円
(前年度繰越金) (本年度不足金) (次年度繰越金)

講演の会 於早雲寺 本会
主催、協賛立木望隆氏主催
郷土文化研究会、南足柄史
談会、後北条顕彰会
◇十月十日(木)
沼田・岩原方面史跡めぐり
◇十一月八〜九日(木〜金)
信濃路史跡めぐり

◇一月二十日(日)
富士宮・浅間神社その他
◇二月十六日(土)
講演会「酒匂川の徒渉」
講師 野頼徳治氏
於小田原図書館
常任理事会及理事会

1/12 4/14
3/16 4/28
5/12
7/13
9/8
10/6
12/8

◇総会と講演
平成三年四月二十七日(土)
◇歴史探訪
◇座談会 二回
◇会報発行 年四回
◇会員名簿発行

日帰三回、一泊一回(奥琵琶湖・湖東三山ほか)
◇講演会 二回(総会を含む)
◇座談会 二回
◇会報発行 年四回
◇会員名簿発行

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店
 小田原銀座 アオキ画廊
 足柄香粧株式会社
 飛鳥屋
 紳士服の **アメリカヤ**
 画材 ガクブチ **ゆうえ**
 伊勢治書店
 株式会社 **かまぼこ** 江島
 税理士 小澤重治事務所
 公認会計士 株式会社
 小田原魚市場
 小田原ガス
 小田原信用金庫
 小田原市農業協同組合
 小田原報徳自動車
 株式会社 **オートセンター・スギヤマ**
 (共) 小田原中央青果株式会社
 オリオン座
 かまぼこ籠 清
 令学苑
 鐘紡株式会社小田原工場
 丸木ボウ化粧品鴨宮工場
 神尾食品工業株式会社
 かみやま小児科クリニック
 興電社
 小伊勢屋
 宝飾専門店 **Shimano**

中華料理 昇玉
 鈴木廣木まほこ
 反寿堂スポーツ
 大営不動産
 割烹 富る海
 茶半家具株式会社
 ちんぎろ本店
 角田ガクフ子店
 東京電力(株)小田原営業所
 株式会社 東華軒
 トーホー建物齋
 八小堂書店
 八子マサ店
 平井書
 富士写真フィルム株式会社
 報徳
 松坂屋
 学生専科 **丸マルク**
 食器の店 マルサンストア
 株式会社 美濃屋吉兵衛商店
 みみづく幼稚園
 ヤオマサ株式会社
 山口菓子舗
 湯浅電池株式会社
 防災器具 優光社

特別賛助会費

平成二年度編集委員会特
 別会計決算報告は次の通り
 です。
 (収入の部)
 本会計より 400,000 円
 特別賛助会費 600,000
 寄付金 100,000
 預金利息 44,833
 前年度繰越金 7,666

合計 1,052,500 円
 (支出の部)
 会報印刷費 800,000
 編集費 70,000
 取材費 30,000
 会報発送費 3,800
 事務費 8,000
 次年度へ 2,600
 合計 1,052,500
 収入のうち、
 特別賛助会費(一口一万
 円)六十二万円は四十九法

人の協賛によるもので、内
 訳は次の通りです。
 一口 鐘紡(株)小田原工場
 三口 富士写真フィルム(株)小田原
 工場
 二口 足柄香粧(株)、(株)小
 田原魚市場、小田原信用金
 庫、小田原中央青果市場、
 小田原瓦斯(株)、カネボウ化
 粧品鴨宮工場、みみづく幼
 稚園、ヤオマサ(株)、湯浅電
 池(株)小田原製作所

以上九法人
 三十八法人
 寄付金は橋本阿掬氏によ
 るものです。
 支出のうち、会報印刷費
 は、第一四一〜一四四号四
 回分です。編集費は、写真
 複写、お礼、寄稿者への通
 信費、コピー代、編集打合
 せなどです。取材費はフィ
 ルム、DPE、カセットテー
 プ、交通費などです。会報

発行費は、特別賛助会員の
 外に、寄稿者、役所、学校
 (小・中・高)、公立・大学
 図書館ほか各文化機関など
 への郵送料です(近くは直
 接お届けしています)。事
 務費は事務用品費です。
 お蔭様をもちまして、充
 実した内容の会報ができ、
 非常に好評を得ております。
 『小田原史談』は小田原の
 文化の一つの顔だという意
 気込みで編集委員一同
 努力いたしております
 ので、今後ともよろし
 く今後とも御支援、御
 鞭撻くださるようお願い
 い申しあげます。

◎隠岐威重氏の「烏蘇
 里江 翠子の場合」は
 紙面の都合により次号
 以下に掲載をいたしま
 す。
 ◎次号は十月発行の予
 定です。



カット 湯川玲子